

# 城郭と戦争の考古学

千 田 嘉 博

【要約】 考古学からの戦争研究は、国家形成や社会進化の究明に成果を挙げてきた。しかし一般理論化を進めるためには物質資料としての防御施設の軍事性を理解・評価することが不可欠である。本稿はまず軍事性理解の重要性を確認し、史跡整備によって具体的に軍事性の理解が示された遺跡を検討した。その結果、復元された施設が防御機能を十分に發揮できず、軍事性の理解と評価に問題があることを指摘した。さらに日本の戦国山城を事例に戦いの有無の認知が、物質資料からと文字史料からでは大きな差があることを述べた。そして基本的に遺跡化した戦場では関連資料が「持ち出し」によって失われていることに留意した検討が必要であるとした。ついで戦争の考古学的状況が保存されていたイギリスと日本の発掘例から戦いを復元した。このうち一六三八年（寛永一五）の鳥原の乱の原城攻防戦では、戦いが投射武器から衝撃武器へと移行し、落城時に多くの人びとが衝撃武器で殺害されたことを具体的に明らかにした。軍事性の視点から分析することで、戦争に関わった遺跡の再評価が可能であり、それを踏まえて考古学からの戦争研究を進める必要がある。

史林 九三卷一号 二〇一〇年一月

## はじめに

近年、考古学による戦争の研究が大きく進展している。とりわけ弥生時代から古墳時代にかけての武器・武具、防衛集落・軍事組織などの復元が進み、戦争が初期国家の形成や社会進化に果たした役割が論じられるようになった。<sup>①</sup> 考古学に

おける戦争研究は、戦争の起源や発達を人類史の中で明らかにすることで、未来に寄与する役割を負っている。また静岡県県の登呂遺跡に代表された平和な弥生時代像を、環壕をめぐらして戦いに備えた拠点集落が分立した弥生時代像へと変化させたように、時代観や歴史像を交換し得る視座も提供してくれる。

考古学による戦争研究は、戦争に関わる物質資料の理解を深めることで、より精緻な軍事組織論や国家形成論、武器・武器、戦争関係遺構の象徴論的解釈の実現を目指す。しかしそれには、まず考察の基礎となる物質資料としての武器・武器、個別の防御施設や総体としての城の構造を正しく捉えることが不可欠である。そして実際の戦いの場で武器・武器・防御施設がどう機能したかを検討しなくてはならない。

こうした基礎作業の正確さが、考古学から過去の戦争をどのように認識し、評価し得るかを規定する。だから考古学からの戦争研究を前進させるためには理論化や法則性の追求とともに、考察の基礎となる物質資料そのものの理解を深め、遺構や遺物の組み合わせの実態や機能の検証を重ねる必要がある。

ただし具体的な戦いの検討は、従来ともすれば学術的な研究対象として見なされてこなかった。たとえば戦いと密接に関わった中世城郭研究においても、堀や土塁・出入り口を直接、防御施設として検討するのではなく、分類や編年によって政治史的な画期の指標として用い、また象徴性を論じる資料として変換して用いてきた。それには第二次世界大戦中までの城郭研究が、著しく軍事史に偏っていたことへの批判が根底にあった。さらに一九八〇年代以降の城郭研究が、歴史研究としての有効性を示すために、意図的に政治史へのアプローチを選択したからでもあった。この結果、石垣の使用や外柵形の出現などの城郭の軍事性を担保した防御施設は、記号的に把握されることになり、防御施設そのものの軍事性を歴史研究として究明する作業が進展しなかった。

しかし藤木久志氏や河合 康氏、近藤好和氏らの研究に代表されるように、中世史研究では戦争そのものを研究対象とすることで新たな成果があげられており、城郭研究でも防御施設の軍事性そのものを評価した研究が注目され、模索され

③ 改めて物質資料に即した軍事性の資料化を、考古学による戦争研究の重要な視点として位置づけ直すべきではないだろうか。④

考古学においては武器・武具の研究が精緻に進められた一方で、堀・壕や土塁、塀・柵、墨線の屈曲、出入り口といった戦いに関係した遺構の検討は、充分深められてきたとはいえない。防御施設としての堀・壕や土塁、塀・柵の解釈の正しさは、防御施設や城を理解する根幹に関わる。これらの遺構解釈を誤っては、そこで行われた戦い、もしくは想定された戦いを、あるいは実際に戦いはなかったとしても防御施設が発揮した象徴性を、考古学的に正しく捉えたいとはいえない。もちろん誤った物質資料の理解による戦争研究から導き出した国家形成論や社会進化論も適切とはいえないだろう。

武器・武具・防御施設が果たした機能を捉える意義は、このように考古学からの戦争研究の基礎となるだけでなく、市民の歴史観形成にも重要な意味をもつことに注意したい。日本各地の教育委員会は文化庁の補助を受けて、市民が理解しやすい遺跡の整備を積極的に推進してきた。そうしたなかで世界遺産に代表される国際的な文化観光が高まり、また国内の歴史ウォーキングや、戦国武将・城のブームによって、多くの市民が実際に遺跡を訪ねるようになった。今日の遺跡の整備はまちづくりの核として、市民が歴史を体感し、地域住民にすぐれた住環境を提供するために、一層重要性を高めている。

弥生時代では佐賀県の吉野ヶ里遺跡、奈良時代では岡山県の鬼ノ城などで、中・近世の城跡では青森県の根城、熊本県の熊本城などで、原位置原寸大の復元建物を含む大規模整備がなされ、象徴的な機能も含めて戦争に備えた歴史的空間が再現されている。こうした史跡整備は発掘調査をもとに専門委員会での厳格な議論を経て実施され、学術的な信頼性が担保されている。専門委員会等の議論は整備・復元のために不可欠な仕組みであり、今後も学術成果を基礎に整備は進められるべきである。

しかし、そうして整備された遺跡の復元内容についても再検証に取り組む必要があると思われる。たとえば中世城郭に

関わる史跡整備で、具体的な防御関係遺構の復元を再検証すると、整備によって示された解釈とは異なる解釈や評価がでる例が少なくない<sup>⑤</sup>。多くの市民が整備された遺跡を通じて歴史を体感していることを考えれば、遺跡の整備を通じて研究者がどのように空間や防御施設を捉え復元したかは、先述したように市民の歴史観の形成にきわめて重い意味をもつ。

そこで本稿では次の諸点について検討を行う。第一に防御施設がいかに理解されたのかを鳥根県田和山遺跡と、立体的な復元整備を行った佐賀県吉野ヶ里遺跡を事例に検証する。ついで戦いの場であった戦場をいかに遺跡として捉えうるかを問題とし、考古学的資料としての戦場の特性を検討する。最後に発掘調査で遺跡としての戦場が検出された長崎県原城をもとに一六三八年(寛永一五)年二月二七・二八日の戦いの実像を考えたい。

なお本稿では弥生時代の防御施設の検討に際して、中世の城郭研究の成果との比較を行う。出入り口や堀の配置といった防御施設の発達には時代や地域を越えた人類史的な共通性と法則性があり、物質資料としての武器・武器、戦争関連施設の分析には比較研究が有効だからである<sup>⑥</sup>。

こうした比較の視点は、日本の城Ⅱ武士の象徴といった一国史観的な評価を越えるために、また一般理論としての社会進化の過程に、戦争に関わった物質資料群を位置づけるためにも意義がある。そして文字史料によつてさまざまな歴史的事実が判明している中世城郭跡について考古資料から検討することで、文字史料からわかる戦いが物質資料からどのように把握されるのかを検証できる点も重要と思われる。

- ① 代表的な研究として次のようなものをあげることができる。佐原 真『日本・世界の戦争の起源』『戦いの進化と国家の生成』人類にとつて戦いとは・第一巻、東洋書林、一九九九年。佐原 真(金岡 恕・春成秀爾編)『戦争の考古学』佐原真の仕事、第四巻、岩波書店、二〇〇五年。松木武彦『人はなぜ戦うのか』講談社メチエ、二〇〇一年。松木武彦『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会、二〇〇七年。橋口達也『弥生時代の戦い』雄山閣、二〇〇七年。
- ② 藤木久志『雑兵たちの戦場』朝日新聞社、一九九五年。藤木久志『飢餓と戦争の戦国を行く』朝日新聞社、二〇〇一年。河合 康『源平合戦の虚像を剥ぐ』講談社メチエ、一九九六年。近藤好和『弓矢と刀剣』吉川弘文館、一九九七年。近藤好和『騎兵と歩兵の中世史』吉川弘文館、二〇〇五年。
- ③ 西股総生『縄張り研究における遺構認識と年代観』『戦国時代の城』高志書院、二九一五八頁、二〇〇九年。松岡 進『軍事施設とし

ての中世城郭』『戦国の城』高志書院、五九—九〇頁、二〇〇九年。

④ もちろんそれは軍事性だけを切り離して検討すればよい、という軍事史に偏重した研究を意図するのではない。現状は軍事史への偏重を避けようとするあまり、城跡や防御施設を備えた遺跡がもった軍事性を分析する視点そのものが、かえって立ち後れてしまったように思われる。こうした遺跡が発掘した政治性や居住性、象徴性といった諸機能の中で軍事性を正しく捉えられれば、個々の遺跡の評価を深めるだ

## 一、軍事性をどう理解してきたか

### (一) 壕の軍事性

先に述べたように考古学から戦争を研究する意義は、第一に戦争の実態を明らかにし(機能的・物質的な体系性の解明)、それをもとに国家や社会(戦争と社会変化、戦争と国家形成・社会進化としての一般理論化)を論じることにある。これらを達成するには、まずは武器・武具、防御施設(堀・壕、土塁、塀・柵、出入り口、櫓)などを正しく理解することが必要である。研究の基礎になる遺物・遺構の評価が誤っていたのでは、そこから導き出した歴史解釈も問い直される。大規模な史跡整備によって可視的に防御施設の機能が提示されている弥生時代の島根県田和山遺跡と佐賀県吉野ヶ里遺跡を取り上げ、中世の北海道勝山館と秋田県岩倉館などと比較しながら、考古学による軍事性理解の基本的な問題を考えたい。

近年の遺跡整備では立体復元などの大規模な整備を行った遺跡では、堀・壕、土塁といった土木工事によってできた部分だけでなく、門、塀・柵、櫓といった建築物まで立体復元される事例も増えている。遺跡がもった本質的価値を市民にわかりやすく伝えるために遺跡整備の重要性はいうまでもない。そして整備のために細部まで歴史的な空間を再構築したことで、研究者がどのように軍事性を捉えたかは如実に示される。こうした視点から整備された遺跡に注目したい。

けでなく社会全体の理解をより深めることができる。

⑤ 千田嘉博「中世城郭の立地とたち」『遺跡学研究』第四号、日本遺跡学会、四六—五三頁、二〇〇七年。

⑥ 千田嘉博「織豊系城郭の形成」東京大学出版会、二〇〇〇年。千田嘉博「日欧城郭防御施設比較論」小島道裕編『武士と騎士——日欧中近世史の研究——』思文閣出版、二〇一〇年刊行予定。

たとえば、東京都の八王子城では、山麓の居館であった「御主殿」に至った大手道を整備し、谷を渡った大規模な木橋を立体復元している。しかし現状の復元は、大手の出入り口ではなく、出入り口の脇にあった櫓台の階段に誤って橋を連結した可能性が高い。また静岡県の山中城では、馬出しと呼ぶ戦国期のくふうした出入り口を検出しながら、後方の曲輪から馬出しへとつづいた橋を復元せず、さらには本来の出入り口の開口部を後世の破壊口として塞いでしまったと思われる。

城の出入り口と城道の軍事性を現状の整備のように理解するか、ここで指摘したように理解するかで、ふたつの城の評価は大きく変わる。整備に向けた検討では、議論を重ねてなお複数の復元案が残り、そのうちのひとつを選んで最終的な整備を行った場合も少なくないと聞く。だから遺跡整備では最終整備案のほかに、別の解釈や評価があることを来訪者に積極的に提示すべきだと思う<sup>①</sup>。

さて島根県の田和山遺跡は丘陵上につくられ、三重の環壕をめぐらした弥生時代の環壕集落であった(図1)。壕の切岸(防御のために築いた人工的な急斜面)は急峻で、防御のための堀にふさわしい。そして田和山遺跡は単純に多重の環壕を備えただけではなかった。囲郭外へ派生していく尾根の鞍部を壕で切断し、あらかじめ尾根筋からの攻撃に備えた点(図1-a)、一六世紀の戦国期山城とも共通した防御施設の配置であった。さらに壕内からは大量の礫(つぶて)を検出し、石鏃や象徴的な軍事指揮権に関わったとされる環状石斧も出土していた。

防御に適した高所への集落立地、三重の環壕の存在、武器の共存、という考古学的な証拠は、佐原真氏による考古学的事実による戦争の認識指標から見ても、戦争があった社会もしくは戦争を認知した社会と考えられ、田和山遺跡の環壕は戦いに備えて堀をめぐらし、武器を備えたと評価すべきだと思われる<sup>②</sup>。

ところが調査では、田和山遺跡の三重の環壕を防御のためではなく聖域を区画したものと結論づけた。その根拠として、三重目の環壕が囲郭内よりも高くなった外側の尾根筋を切っていたことをあげた(図1-b)。こうした壕の布設は防御施

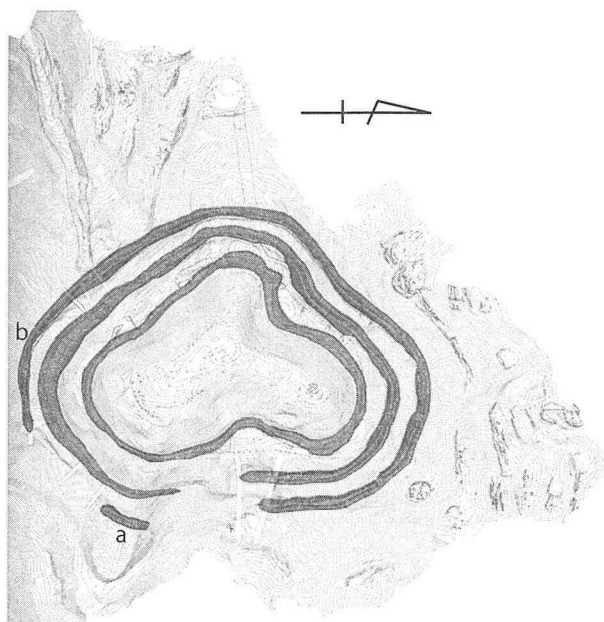


図1 島根県 田和山遺跡（松江市教育委員会編2001）所収図に加筆

しかし、それでも囲郭内よりも高い尾根筋に、何故わざわざ壕を設けたのか、という疑問は残る。本当に防御性の観点から説明不可能な壕の配置としてよいのだろうか。一六世紀の戦国期山城がしばしば尾根筋に多重の堀を設けたことは先に述べたが、尾根筋を遮断した堀は必ずしも城内より低い位置に築いたとは限らなかった。派生した尾根筋の先端に立地した城では、城の背後の尾根筋は必然的に城域内より高所になることが多く、その場合は城域背後の高所はもっとも警戒

設としては説明できないので、神聖な山頂部を囲った精神的な区画としたのである。

問題とされた壕は田和山遺跡の壕のうち一番外側のもので、囲郭範囲から隣接したピークへつづく主たる尾根筋の鞍部に布設したものであった（図2）。およそ尾根筋はもつとも登りやすいので攻め口にされる可能性が高く、時代と地域を問わず城の防御の要所になった。そのため戦国期の山城では、尾根筋への守りの配慮を重点的に行った。尾根筋に堀切りを設けて遮断したのはもちろん、その堀を多重にめぐらしたこともごく一般的に見られた。すでに指摘したように田和山遺跡でも尾根筋へ念入りに壕を配置して守りに腐心したようすが分かる。尾根筋が弱点になることを田和山の人びとは知っていたのである。だからそもそも問題とされた尾根筋にも壕が回り込んで多重になっていたことは合理的に説明できる。





点から壕の配置を説明できる。田和山遺跡の壕を軍事的なものと思え直すことは遺跡評価の根幹を変えるに等しく、田和山遺跡からどのような弥生時代社会を描くかにも大きな違いをもたらす。考古学から軍事性を把握する意義はきわめて高い。

## (2) 堀の軍事性

吉野ヶ里遺跡は国指定特別史跡として保護と活用が進み、環濠で囲まれた広大な範囲が歴史公園として整備され、国内でも大規模な立体復元を推進している遺跡のひとつである。このうち北内郭は多重の環壕のなかに楼閣や櫓が建ち並び、邪馬台国時代のクニ中枢部を明らかにしたと評価されてきた。吉野ヶ里遺跡は教科書にも取り上げあげられている弥生時代の拠点集落の代表である。

整備した北内郭では、まつりごとを司った「主祭殿」や物見櫓、北内郭を囲んだ環壕と土塁、板壁などを復元している。出入り口（虎口）も導線を屈曲させた形状で、一六世紀末の戦国期城郭で現れた連続枡形に相当した形状であった。全体としてきわめて嚴重な囲郭を想わせる復元で、現地の説明においても北内郭が戦いに備えて守りを固めていたとしている（図4）。

しかし軍事性の視点から見ると、いくつもの疑問点が浮かび上がってくる。特に北内郭の内環濠・外環壕に伴った土塁と板塀、出入り口と板塀の解釈には大きな問題がある。北内郭は二重の環壕で守ったが、環壕はいずれもV形の断面を持ち、壕内土層の分析から外側に土塁を備えたと判断された。そして環壕外縁の土塁上に板塀を復元している（図5）。内環壕の土塁に伴った板塀は、わずかな隙間をもつ塀として意匠を復元している。これに対し外環壕に伴った板塀は、まったく隙間のない塀として意匠を復元している。こうした意匠を選んだ理由は、北内郭内を外から見られないようにしていたからと説明されている。



図4 佐賀県 吉野ヶ里遺跡北内郭（七田ほか編1997）所収図に加筆

二重の環濠で囲い、外側へ張り出した物見櫓を備え、屈曲した防御的な出入り口をもった北内郭が防御的な意図をもって建設されたことを疑う余地はない。ところが実際の戦いに備えて弥生時代の吉野ヶ里の人びとが、こうした施設を建設したとすると、わずかな隙間しかない板塀では、北内郭内から隙間をねらって外部に矢を放つことは至難の業だから、防御に著しい支障があったと思われる。

つまり北内郭の攻め手が内環壕外側の土塁に登り、板塀を乗り越え、内環壕に侵入して、北内郭の人びとはようやく組織的防御を行えた、という復元となっているのである。「主祭殿」の最上階に登れば展望が開け、外環壕の土塁まで見通せた。しかし内環壕の板塀が障害になって、やはり内環壕と外環壕との間に広がった帯曲輪状の空地に対しての防射は、

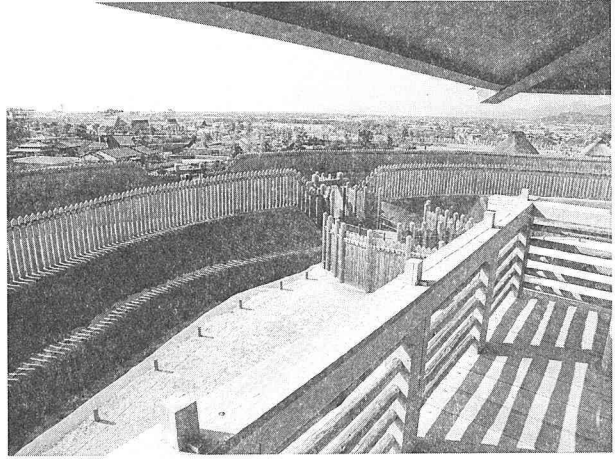


図5 北内郭の「主祭殿」から見た二重環壕と板塀



図6 北内郭の物見櫓と内環壕の板塀

およそどの方角に対しても阻害されていた。<sup>⑤</sup>

「主祭殿」は防御のための施設ではなかったから、そうした意図ははじめからなかったと考えることは可能である。しかし北内郭の内環壕に沿って張り出した物見櫓からも内環壕に伴った板塀で内・外環壕間の帯曲輪状空地への防射が阻害された復元になっており（櫓の上から帯曲輪内を見通せない）、内環壕内は見通せても内環壕対岸の空地（帯曲輪）へ、防御

機能を發揮できなかったといいたいへん奇異な構造となっている（図6）。

北内郭を囲んだ外環壕では、事態はさらに深刻であった。先述したように外環壕の外側土塁上の板塀は、密集して隙間のない意匠として復元している（図7）。このため北内郭の内・外環壕に挟まれた帯曲輪状の空地から外環濠の外部へ、防御のための矢を射ることは一切できなかったという復元である。見通しの利かない板塀では攻め手がどこまで近づいてきたかを察知するのも難しかったのではないか。だから復元された北内郭の軍事的状況は外環壕についても、攻め手が土塁を登り、板塀を乗り越え、外環壕に侵入してはじめて、吉野ケ里の人びとは防戦したことになる。

北内郭の内・外環壕は墨線の郭内側に壕があり、郭外側に土塁があった。このため接近した敵に有効な衝撃武器（剣など）は、攻め手が環壕の内側壁面を登り郭内に達してはじめて効果を發揮した。ここまで攻め手に侵入されては北内郭の落城は必至であり、だからこそ壕や板塀越しに投射武器（つぶて、弓矢など）で防戦することは、北内郭の防御機能にとって決定的な意味をもったと考えられる。それができない意匠の土塀を吉野ケ里の人びとは採用しただろうか。

出入口をめぐる板塀の意匠にも同様の問題がある。北内郭への出入口は内・外環壕を越える部分で道筋を屈曲させ、板塀で囲んだ特別な広場（虎口空間）を経由させたプランで、平面構造からきわめて防御性の高いものと評価される。ここでは道筋を屈曲させ、特別な広場を形成した板塀の柱痕を發掘で検出しており、平面の復元に疑問はない。しかし枡形を構成した板塀は隙間のない意匠として復元している。透間のない板塀による区画では、出入口に迫る攻め手を安全な板塀の内側から防射することも、槍や矛・剣で防戦することもできなかった（図8）。

枡形のような通路の屈曲と特別な広場を組み合わせてくふうした出入口は、日本においては弥生時代の吉野ケ里遺跡にはじまり、その後、古墳時代の豪族居館であった群馬県の三ツ寺I遺跡や、中・近世の城郭などに確認できる。そしてヨーロッパでは鉄器時代の城塞都市（ヒルフォート）、ギリシャ・ローマ時代の砦や防御都市、中世城郭や城郭都市に使用された。つまり鍵の手形の城壁によってできた広場と城道の屈曲を組み合わせた枡形や、城外側に突出した広場と城道の

屈曲を組み合わせた馬出しは、人類に共通した出入り口のくふうであり、外柵形・内柵形、馬出しという高度な出入り口の三大類型は、さまざまな時代と地域の人びとがそれぞれに到達した、防御と出撃に効率的な最適解の出入り口プランであった。<sup>⑦</sup>

吉野ヶ里遺跡北内郭の出入り口は、弥生時代の複雑な出入り口というだけでなく、こうして人類史的にも位置づけられ

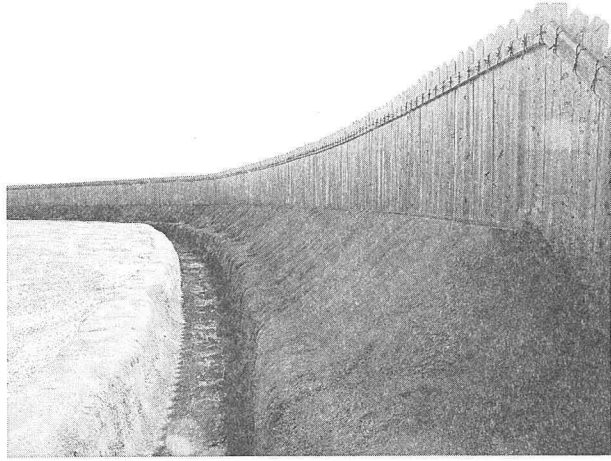


図7 北内郭外環壕の土塁と隙間のない板塀

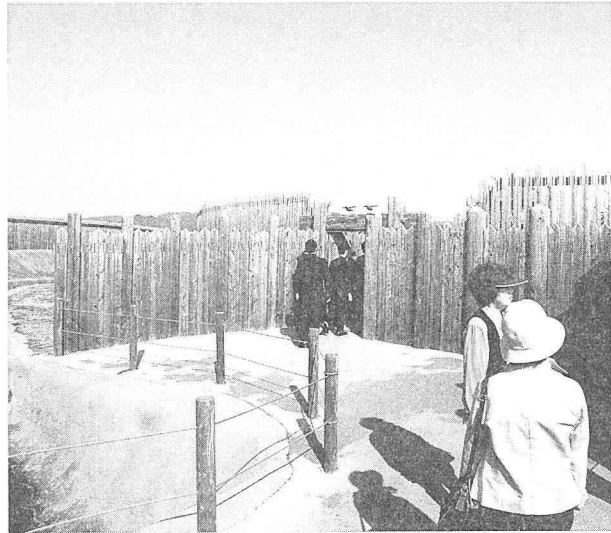


図8 北内郭の出入り口と板塀

るものである。しかし、およそ枳形や馬出しを用いながら、防御の要であった虎口空間内への防射ができないようにしたとは考え難い。もしそうだったとすれば弥生時代の吉野ヶ里の人びとは、形式的には先端の防御施設を採用しても、本質的な防御機能を理解していなかったことになる。これは弥生時代の人びとが戦争の思想や技術をどう受容したかの評価に  
関わる。

北内郭の出入り口で枳形を構成した柱穴は間隔を開けて配置されていたから、隙間をもった板塀と解釈するのに支障はなかった。仮に復元したような隙間のない板塀であったとしても、礫（つぶて）や矢を射出した狭間を備えたと考えるべきだと思う。実は北内郭の内・外環壕に伴う土塁は、検出時には大きく削平されていて、その高さや土塁上の堀（柵）の有無、形状について考古学的情報はきわめて乏しかった<sup>⑧</sup>。だから板塀の意匠は研究者がもった軍事性のイメージが大きな位置を占めた。現状の復元は軍事性を充分發揮した防御施設になっていない。復元整備にあたって、さらに踏み込んだ軍事性の機能分析が必要だったのではないか。

そして板塀の意匠だけでなく、環壕外側の土塁の形状についても再検討すべき課題がある。弥生時代の拠点的な環濠集落では環濠の外側に土塁を備えたものが多くあったことが知られている。吉野ヶ里遺跡もそのひとつであり、内・外環壕の外側に土塁があった。復元した土塁は環濠を挟んで郭内を見下ろす程の高い土塁として整備している。一六世紀の戦国期山城でもごく一般的に堀の外側に土塁を備えた。これを対岸土塁と呼ぶ。対岸土塁は城外から掘底までの比高差を大きくして堀を深くするとともに、攻め手が堀へ突入するのを阻止した。

戦国期山城では対岸土塁をどれほど高く積んでも、城内の曲輪面より高くなつて曲輪内を見下ろすようにはしなかった。城外から城内が攻め手に見下ろされるのは不利だからである。つまり曲輪面のレベルを考慮しつつ堀の対岸土塁を積んだことがわかる。弥生時代の環壕に対岸土塁があったことは環壕埋土の堆積状況から確実である。ただし中世城郭の対岸土塁と比較して考えれば、吉野ヶ里遺跡の対岸土塁の高さは過剰な復元になっている可能性がある<sup>⑨</sup>。



図9 北海道 上ノ国勝山館の土塁と丸太塀

このように弥生時代の吉野ヶ里遺跡を事例に軍事性の視点から検討すると、板塀などの復元にいくつかの疑問点があることを述べた。軍事性を物質資料に即してどう理解したかということの妥当性を問うているのだが、こうした問題は当然、弥生時代の遺跡だけでなく、中・近世の城跡でもあり得た。

たとえば戦国時代の遺跡である北海道の上ノ国勝山館では、尾根筋に展開した城域の背後を守った堀と土塁を立体的に整備し、土塁上に丸太塀を復元している(図9)。この丸太塀も隙間がまったくくない意匠としている。発掘時に検出した丸太塀の柱穴を再確認すると、柱穴は布堀のなかに間隔を置いて並んでおり、隙間をもった丸太塀か柵であったと考えられる<sup>⑩</sup>。だから現在の丸太塀の意匠は、考古学的な発掘成果とも矛盾するといわざるを得ない。この結果、勝山館でも攻め手が堀を渡り、土塁を駆け上り、丸太塀を登って城内に踏み込んで、ようやく城兵は防戦できたと軍事的状況を解釈したことになる。

丸太塀は高い土塁の上であり、復元した塀は隙間がなく、かつ一般的な成人男性の背丈を遙かに超えた高さであったから、勝山館の人びとは城外のようすをうかがうことはもちろん、接近する攻め手に対して鉄砲や矢を射出して防戦することも、現状の復元では叶わない。和人とアイヌの人びととの戦いには一四五七年のコシヤマインの戦いなど、いくつもの戦いが知られている。勝山館も大規模な堀や土塁をめぐらして戦いに備えたことは間違いない。問題にしている本丸背後の堀と土塁による防御線は、城内より高所となる城外の尾根つづきから

の攻撃に備えたものであり、守りの要の位置を占めた。だから復元された丸太塀の軍事性理解には疑念が残る。<sup>①①</sup>  
 すでに指摘したように、吉野ヶ里遺跡北内郭も上ノ国勝山館もいずれの例も投射武器の使用が可能で、接近した敵に対しては衝撃武器で防戦できた隙間がある塀や柵であったと想定すべきだと思われる。考古学が物質資料の研究である以上、塀や柵の細部まで機能面から究明することが重要ではないか。そうした作業があつてこそ実証的に考古学の立場から戦争を捉えられるに違いない。

- ① 前掲、はじめに⑤文献参照。
- ② 前掲はじめに註①文献、佐原真「日本・世界の戦争の起源」『戦いの進化と国家の生成』人類にとつて戦いととは・第一巻、東洋書林、一九九九年(のち、佐原真(金関恕・春成秀爾編)『戦争の考古学』佐原真の仕事、第四巻、岩波書店、二〇〇五年、一〇二―一四八頁に所収)。
- ③ 松江市教育委員会編『田和山遺跡』二〇〇一年。
- ④ 秋田県埋蔵文化財センター編『岩倉館』二〇〇七年。
- ⑤ 「主祭殿」とされた楼閣が実際はどの程度の高さであったかによって板塀との関係は異なる。ここでは復元された「主祭殿」と板塀との関係で検討している。
- ⑥ 城郭や防御施設の入出口が発達すると、出入り口の周囲に防御と出撃の拠点になった意図的な空地を設けるようになった。一般に枳形とされるもので、城郭の空間分析にもつく評価では虎口空間と呼ぶ。虎口空間と城道の屈曲とを組み合わせることで高い軍事性を備えた出入り口が生み出された。
- ⑦ 千田嘉博「織豊系城郭の入出口」『織豊城郭』第6号、織豊期城郭研究会、一九九九年、一一―一四頁。
- ⑧ 七田忠昭ほか編『吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会、一九八九年、一九九〇年、一九九七年、二〇〇七年。
- ⑨ 本来の曲輪面が後世に削平されて当時の生活面として復元された面の標高が実際よりも低くなっていることと、土塁そのものの復元高とを考慮することで、壕外側の土塁が庄館的に郭(曲輪)内より高いという問題は解決できると思われる。なお弥生時代の環壕に伴った土塁復元の問題については久世辰男氏の指摘がある。久世辰男「弥生環壕集落の環壕外土塁についての疑問」『利根川』第一四号、一九九三年、七三―七七頁。
- ⑩ 松崎瑞穂編『史跡上ノ国勝山館跡3』上ノ国町教育委員会、一九八二年。
- ⑪ 近年整備が進められている曲輪の丸太塀は、隙間をもった意匠に修正されている。さらに本稿で疑念を指摘した城域背後の土塁に復元した丸太柵も、老朽化を理由とした再整備が予定されており、二〇一〇年度に発掘成果にもついた意匠に改める予定と聞く。いずれも適切に判断と思われる。一般論として史跡整備の学術的な間違いがのちに判明してもすみやかに修正されることは希であるように思われる。史跡整備には多くの補助金が投入されていることも関係しているのだろう。しかし疑念のある評価がそのまま現地で展示されつづければ、市民の歴史認識を形成していく弊害は大きい。
- ⑫ 塀や柵の軍事性を把握するという点では、ここでふれた以外にも疑問のある事例が少なくない。たとえば熊本県にある人吉城では、近世



段階に球磨川から出入りした水の手門周辺の土塀を立休復元している。しかし人吉城歴史館の復元模型では弓矢や鉄砲を撃つための狭間を備えた塀としているのに対し、現地に原寸大で復元した土塀では狭間を

省略してしまっている。復元された土塀は城郭の果たした軍事性にとって決定的な要素を欠いており、史跡の整備としての妥当性が問われ

## 二、遺跡としての戦場の特質

### (1) 文字史料と物質資料の不整合

ここでは遺跡としての戦場の特質を戦国期を事例に考える。中世から近世初頭にかけて文字史料から数多くの城の攻防戦が知られている。これに対して城跡の発掘調査では、戦争そのものの存在を証明する武器・武具・殺傷人骨の出土数はきわめて少ない。文字史料から分かることと、遺跡調査からわかることには大きな違いがあるのである。こうした違いをもたらした原因は、片付けや「持ち出し」によって戦場がそのまま遺跡として残ることが希だったからである。だから物質資料を通じて戦争を考えるには戦いの痕跡はそのまま残りにくいことに留意して議論を進める必要がある。

たとえば静岡県の高天神城は徳川氏の遠江防衛の要であり、また武田氏にとつては遠江進出の拠点となった重要な境目の城であった。武田氏と徳川氏との間にこの城をめぐる激しい攻防戦がくり返されたことはよく知られている。一五七一年（元龜二）には武田信玄が高天神城を攻めたが落とせず、一五七四年（天正二）に武田勝頼が再び攻めて落城させた。

この後、高天神城は武田氏の境目の城となったが、徳川家康は周囲に付城を築いて対抗し、一五八一年（天正九）の攻城戦で家康が奪還した。この戦いで武田方の城兵はほぼ全滅したとされる<sup>①</sup>。

崖に囲まれた高天神城で唯一ゆるやかな斜面に面した二の丸北西部は、常に攻防戦の帰すうを決した激戦の場であり、また城としてもっとも防御を固めた地区であった。この二の丸北西部周辺はほぼ完全に発掘され、曲輪に沿って伸びた横堀や複雑な出入り口、籠城で使用した堅穴建物などが判明した。しかし武器は検出されず、わずかに武具として小札と陣

笠片の各1点が出土しただけであった。そして戦死者の遺骨は見つからなかった。<sup>②</sup>考古学的な証拠だけから、ここが戦いに備えた施設であったことは確実としても、実際に戦いがあったことを証明することは困難である。

一五八四年(天正二二)の小牧・長久手の戦いは、羽柴秀吉に対し織田信雄・徳川家康連合軍が尾張・伊勢・伊賀を戦場として戦った。両軍の主力が激突したのは尾張北部の戦場で、双方が多数の陣城を築いて対峙した。膠着状態を打開するため秀吉は三好秀次を大将に主力の一部であった池田勝入・森長可・堀秀政を割いて三河へ中入りする作戦を実行した。これで家康を陣地からおびき出し、野戦で決着をつけようとしたのである。<sup>③</sup>

徳川軍を本陣の小牧城から出撃させるために羽柴軍の三河中入り部隊は、道中の城を攻撃しながら進軍した。池田・森軍の急襲を受けて落城した愛知県日進市の岩崎城は、文字史料によれば籠城していた武士と、ともに戦った商人二四〇名もしくは三〇〇名が戦死し、攻めた池田・森軍にも四〇〇名の戦死者が出たという。<sup>④</sup>しかし本丸・二の丸の発掘調査では、小牧・長久手の戦いの頃と推測される建物跡や小鍛冶遺構、堀、土塁を検出したが、武器・武具、戦死者の遺骨は見されなかった。<sup>⑤</sup>やはり岩崎城でも考古学的な証拠だけでは実際はこの城が戦場となり、多くの人びとが戦死したことを証明するのは難しい。

また一五九〇年(天正一八)に豊臣秀吉が小田原北条氏を攻め、北条氏を滅亡させたことはよく知られている。豊臣軍と北条軍が最初に戦端を開いたのが静岡県三島市の山中城であった。山中城は北条氏の境目の城として豊臣軍の攻撃に備えて工事を重ねており、北条氏の最先端の軍事拠点になっていた。北条軍の籠城兵約四〇〇〇名に対し、豊臣軍七万余人が攻め寄せ、豊臣軍は自軍の被害を顧みずに山中城を攻めた。およそ半日の攻防戦で城は落城し、籠城兵の多くが戦死したとされる。

山中城の主要部は史跡整備に伴って計画的に発掘されている。<sup>⑥</sup>戦国期の山城を発掘にもとづいて整備する先駆けとなった山中城は、城跡の史跡整備の上で学史的な位置を占める。主要な城域をすべて発掘した成果では、武器片が一〇点程度、

礫が三七八点、鉄砲玉が一九六点、武具片が二一点程であった。一定の武器・武具があったことは考古学的に確実としても、七万数千人もの人びとが戦ったことを想像することは難しい。『渡辺水庵覚書』などの文字史料からわかる激戦のようすと、現地に残された戦場の物質資料とは大きく乖離した。ここでも考古学的証拠だけで戦いの有無を証明することは難しい。

このように文字史料で激しい戦いがあり落城したことが確かな城跡を発掘しても、それに対応した考古学的な戦いの痕跡はほとんど検出されず、物質資料から激戦が交わされた証拠を示せないという状況は多くの中世城館跡に共通した。文字史料と物質資料との不整合の原因は資料の腐食や滅失だけでなく、戦いののちに戦死者を供養し武器・武具を再利用したことにより、戦死者の遺体や戦いを物語る物質遺物が戦場から運び出された「持ち出し」による部分が大きかった。そして、こうした遺跡としての戦場の特質は、時代や地域を越えて共通した。

多くの城跡や防御施設の発掘成果は、一般に生々しい戦争の姿を物語る、とイメージされてきたが、実は「持ち出し」によってリアルな戦争の痕跡は通常では残らないことに注意しなくてはならない。だから戦争に関わった遺跡の分析では、戦いの存在を証明した資料の多くが失われていることに留意が必要である。たとえば弥生時代の研究では、環壕集落の壕や土塁の機能について多様な評価がある。壕や土塁がもつたさまざまな機能のなかで、直接の戦いの痕跡がないことで戦いに備えたものではなかったと評価してよいかは、改めて考えるべき問題ではないだろうか。

## (2) 物質資料に見る戦場

つぎに戦いの実像を物質資料から捉えた例として、イギリスのクリックリー・ヒル (Crickley Hill) と、岩手県二戸市の九戸城の発掘成果をあげたい。紀元前二五〇〇年前の環壕集落遺跡であるイギリスのクリックリー・ヒルは、防御遺跡という側面を持っていた。環壕と土塁周辺の発掘で、囲郭の出入り口とそこからつづく通路から集中的に石鏃を発見し、

弓矢による戦いののち、家や門が焼かれて集落が廃絶したと分析された（図10）。そして四〇〇点にもおよんだ石鏃の特徴的な分布は、この集落をめぐる戦いの経過を示すと評価された。<sup>⑦</sup>

戦いが環壕と土塁を挟んで行われ、特に出入り口の攻防が激しく、攻撃側と籠城側が多く弓矢を射て戦ったという闘復元は、攻城戦の一般的な法則に合致して首肯される。さらに囲郭内の通路に沿って石鏃が多く分布したのは、出入り口を攻撃者が突破したのちに、通路上で戦いがつづいたと考えることができる。クリツクリー・ヒルでは戦闘で使用した石鏃が再利用や取りかたづけをされず、集落が戦いの直後に火を掛けられて廃絶したことで、戦いを復元可能な考古学的状況が保存されたといえよう。このように戦いに関わる物質資料が良好に残されれば、考古学から詳細な戦争の実像を描き出すことができることをクリツクリー・ヒルは証明している。

日本の九戸城をつづいて検討する。一五九〇年（天正一八）から進められた豊臣秀吉の奥羽仕置は、大名たちを惣無事令に従わせ、検地を踏まえて大名の領域を確定して豊臣政権の本州北端まで敷衍したものであった。同年に秀吉は南部七郡の領主として南部信直を認める朱印状を発給したが、この裁定を不服とした九戸政実らが一揆を起こした。

一五九一年（天正一九）六月に南部信直は秀吉に面会して援軍を要請し、豊臣秀次を大将に、浅野長吉・蒲生氏郷・南部直信・津軽為信らによる豊臣軍数万人が九月二日から九戸城を攻めた。九月四日には籠城を指揮した九戸政実が投降し、九戸城に籠城した数千人の人びとは助命される約束であったという。しかし『信直記』や『蒲生氏郷記』などの近世の軍記物では、城内に突入した豊臣軍によって籠城した老若男女は皆殺しにされたという。浅野長吉の書状には籠城した「悪徒人共の事は悉く首を刎ね、首数百五十余」と記した（天正一九年九月一四日付 長東正家宛浅野長吉書状『浅野家文書』）。

九戸城二の丸大手門周辺で行われた一九九五年の発掘調査では、直径一・八mの土坑を検出し、内部から十数体の頭骨を伴わない人骨群を発見した。<sup>⑧</sup> 百々幸雄氏の分析によれば、人骨は頭部がなく壮年男性（二〇―四〇歳）、熟年男性（四九歳と推測された者が最高齢）、壮年女性のものであった。一八歳以下の若者は含まれなかった。壮年男性が大多数であり、

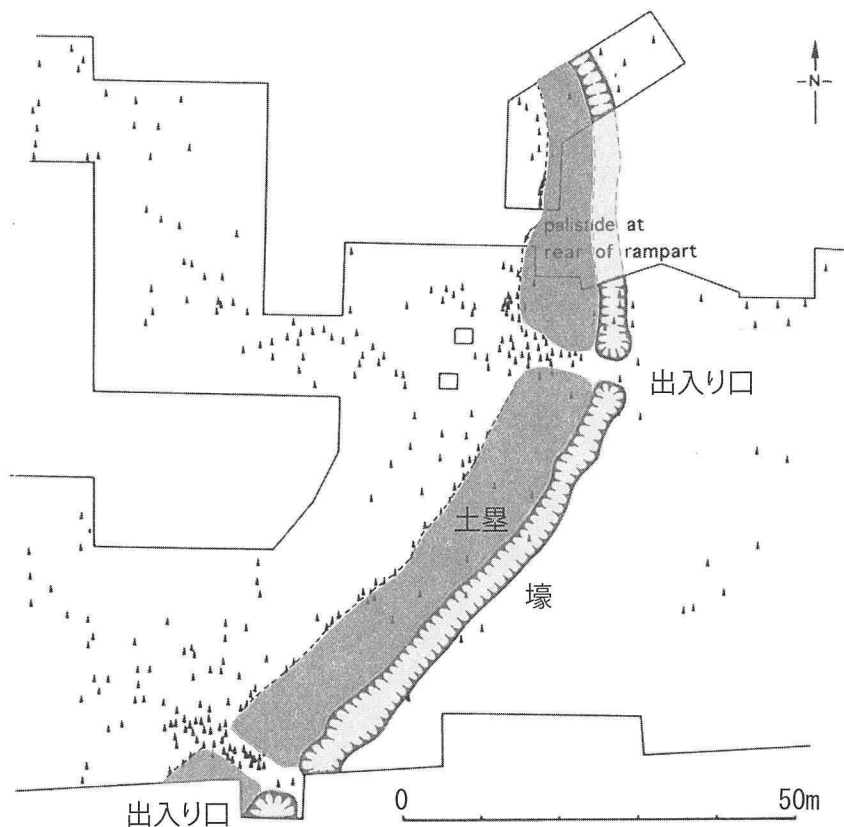


図10 イギリス クリックリー・ヒルの囲郭と石鏃の分布 (Mercer1990) 所収図に加筆

女性はいくとも二名いた。四肢骨(上腕骨・大腿骨など)は一〇〇点あり、そのうちの四一%に傷があり、そのほとんどが刀創痕であった。このうち複数の刀創痕があった人骨は一七%あった。また寛骨に火縄銃の弾丸による貫通銃創が認められるものが一点あった。弾丸が貫通した射入孔と射出孔が明確に識別できたことから、正面上方から火縄銃に撃たれたと推測された。<sup>⑨</sup>

九戸城二の丸土坑から出土した人骨は、検出状況と多数の人骨に認められた刀創痕や銃創痕から明らかに九戸城の籠城戦に関わって戦死した人びとの遺骨と判断される。すべての人骨が頭部を失っており、首を討ち取

られたとみて間違いない。多くが刀傷であったこと、骨髄に達し、あるいは骨の切断に至る刀による強力な打撃を受けてこれらの人びとは亡くなっており、衝撃武器による接近戦で死傷したことがわかる。百々氏は四肢骨に多くの刀創が認められたことから、単に敵を落命させ、首級を挙げる所作以上の行為が実施されたとし、無抵抗な籠城者を撫切りで殺りくした証拠と判断した。

文字史料も籠城者の首をはねたと記しており、発掘された人骨も戦場での殺傷の実態を明らかにするものである。しかし発見されたのは遺体を処理された十数人分のみであり、また戦場ではなく、すでに土坑へと片付けられた状態であったから、戦場そのものを検証できたわけではない。さらに後述するように長崎県の原城でも四肢骨への刀創痕は顕著であった。九戸城の戦死者に見られた刀創痕が撫切り、殺戮によるものとしてよいかは、次章で原城の事例と合わせて検討したい。

- ① 小和田哲男『高天神城の総合的研究』大東町教育委員会、一九九三年。
- ② 鬼沢勝人・夏目不比等編『史跡高天神城跡——二の丸ゾーン発掘調査報告書——』大東町教育委員会、二〇〇四年。
- ③ 千田嘉博「古戦場」小島道裕編『史跡で読む日本歴史』第七巻・戦国時代、吉川弘文館、二〇〇九年、八二—九九頁。
- ④ 一七三二年(享保七)に成立した『岩崎籠城戦死之記』では二四〇名が、一七九〇年(寛政二)に成立した『丹羽軍功録』では三〇〇名が戦死したとする(三鬼清一郎監修『長久手町史 資料編六』中世長久手合戦史料集、長久手町、一九九二年、二二〇—二二三頁および、九三〇—九三六頁)。
- ⑤ 前川要『岩崎城跡発掘調査報告書』日進町教育委員会、一九八七年。
- ⑥ 山中城跡発掘調査団・三島市教育委員会編『史跡山中城跡』一九八六年。
- ⑦ Mercer J. Roger, *Causewayed Enclosures, Shire Archaeology*, 1990, pp.33-38. クリックリー・ヒルの戦闘復元については、都出比呂志『都市の形成と戦争』『考古学研究』第四四巻第二号、一九九七年、四一—五七頁から多くを学んだ。しかし都出氏が遺跡をハンブルド・ヒルとしておられる点は修正しておきたい。なおクリックリー・ヒル防禦については、Dixon, Philip, *Crickley Hill, Vol.1, The hillfort defences*, Crickley Hill Trust and the Department of Archaeology, University of Nottingham, 1994. を参照。
- ⑧ 百々幸雄ほか『骨が語る奥州戦国九戸落城』東北大学出版、二〇〇八年。
- ⑨ 前掲註⑧文献所収、百々幸雄『九戸城二ノ丸跡出土人骨』『骨が語る奥州戦国九戸落城』東北大学出版、二〇〇八年、六七—一九頁。

### 三、発掘された寛永一五年二月二十八日の戦場

島原の乱では、原城に籠城した一揆軍と幕府軍との間で壮絶な戦いがくり広げられた。南有馬町教育委員会から南島原市教育委員会に受け継がれて進められている原城本丸および原城大手枡形の発掘では、膨大な数の殺傷人骨が検出されている。この原城の攻防戦を検討して、物質資料から原城で行われた戦いの実像に迫りたい。まず幕府や参陣した大名の記録から島原の乱の経緯を簡単にまとめる。<sup>①</sup>

一六三七年（寛永一四）一〇月に島原・天草の一揆からはじまった戦いは、一二月になると原城に一揆軍三万七千人が集結して籠城戦となった。幕府軍は上使・板倉重昌の指揮のもと二月一〇日、二〇日、一六三八年一月一日の三度にわたって総攻撃を行った。特に一月一日の総攻撃は熾烈を極め、幕府軍は原城の三の丸堀際まで迫った。しかし一揆軍の防戦によって上使・板倉重昌が戦死し、幕府軍は多数の戦傷者・戦死者を出して撤退した。この攻撃の三日後に島原に着陣した第二の上使・松平信綱は無理な攻撃を中止し、嚴重な包囲陣を引いて一揆軍が疲弊するのを待つ戦略に切り替えた。

途中一揆軍の夜襲などがあったものの、幕府軍の包囲陣は嚴重で、しだいに一揆軍は追い詰められた。幕府軍は仕寄（前進陣地）をしだいに城内に近づけ、鉄砲や大砲で城内を制圧していった。そして二月二七日に鍋島軍が、一揆軍の撤収によって無人になっていた原城二の丸出丸へ、仕寄を伸ばしたことから予期しなかった戦端が開かれた。鍋島軍がそのまま二の丸への乗り入りを果たすと、松平信綱は全軍に攻撃を命じ、幕府軍の城内への乱入がはじまった。

幕府軍はその日の夕刻までに一揆軍の抵抗を排除して二の丸、三の丸を落城させた。この戦場に細川軍を指揮して加わった細川忠利は、夕刻に原城の本丸石垣下まで進軍し、細川軍は本丸東側の蓮池門周辺から本丸への乗り入りを果たした。しかし夕暮れとなり、また本丸へ放火したため炎と煙でそれ以上は進めず、本丸東部の一角に柵を打って境界を設け、一夜を明かした。

翌二月二八日の日の出前から幕府軍は総攻撃を開始した。天草四郎は本丸の陣小屋で討たれた。すでに前日に本丸に火が放たれていたもので、生き残った一揆軍の人びとは本丸の巨大な外枳形であった大手虎口へと避難していた（図11）。そこに幕府軍は四方から攻め寄せた。戦闘は昼ごろまでに終了した。細川忠利は書状で、「廿八日之きりしたんころし候丸」、諸手寄相きりしたんころし候丸、廿八日也」と絵に注記して、最後の激戦が本丸の連続した外枳形であったことを記した（細川忠利自筆絵入書状）。幕府軍側の記録では首を二万余取ったとあるから、原城最後の戦闘となった二月二七・二八両日の戦闘の一揆軍の戦死者は膨大であった。

そしてまさに細川忠利が「きりしたんころし候丸」としたところの発掘調査が、南有馬町教育委員会から南島原市教育委員会に受け継がれて行われた。その結果、一六三八年（寛永一五）二月二七・二八日に実行された幕府軍の総攻撃による一揆軍のおびただしい戦死者の遺骨が発掘された。遺体には刀によりえぐられた大腿骨、刀で脛あるいは腹部を切断された人骨、頸部を切断された人骨、首より下の部位と切断された頭骨が折り重なって発見された（図12）。一九九七年までの調査でおよそ三〇〇点の人骨が検出され、分部哲秋氏の分析によれば、老人男女、壮年・青年男女、子供の人骨があり、籠城した一揆の人びとが無差別に殺害されたことがわかる。

これらの人骨は腐敗が進むと最初に分離する関節の部位が接合した状態で検出されているので、長く放置されそれらが分離した末に埋没したのではなかった。またおびただしい殺傷人骨は崩された本丸石垣石材層の直下で、当時の生活面の直上から発見された。石垣に近い部分では、原城の廃城時に破却された土塀や櫓の瓦が捨てられていたから、生活面に堆積していた瓦片の直上から人骨を検出したところもあった。つまり特別な埋葬がされたのではなく、死傷した状況に近い形状を保ったまま、石垣の破却によって埋没したと考古学的に捉えられる。

鍋島家の記録によると原城が落城した二月二八日の午後二時頃から幕府軍は黒田・寺沢両大名に城の掃除と死体の片付けを命じた（『元茂公御年譜』）。本丸内の発掘では連続した外枳形のような殺傷人骨を検出しなかったのは、この片付けに





図11 長崎県 原城本丸（本丸右下の道路に沿った矩形の区画が連続した外柵形）



図12 原城本丸外柵形で検出された人骨

よると考えられる。また二七日の放火によって遺体も焼かれていた。発掘では本丸の埋土におびただしい数の被熱した骨片が混ざっていたことを確認しており、発掘成果とも符合する。

そして松平信綱は翌々日の三月一日に石垣を取り崩させた<sup>③</sup>。このように落城の二日後に原城の石垣を破却したことが文字史料から確認できるので、崩された石垣石材の直下から間層を挟まずに発見された殺傷人骨は、出土層位と人骨の検出状態から二次的な死体の遺棄ではなく、一六三八年二月二七・二八日にかけて原城の最終的な戦場そのもの、もしくはそれにきわめて近い状況を示したと評価できる。

人骨は頭部のみ、上半身（多くは頭部を伴わない）、下半身、上肢部のみ、下肢部のみ、などの状態で検出され、上向き、うつぶせなど体の向きは一定していなかった。人骨が集中したところでは何人もの人骨が重複しており、遺体が折り重なっていた様子が読み取れた。ただし殺傷された人骨の近辺には刀や槍といった武器や武具がほとんど伴わなかった。女性や子供を含んだにしてもこの状況は不自然であり、幕府軍によって再利用可能な武器・武具は持ち出されたと考えるべきであろう。また多くの殺傷人骨が頭部を失い、あるいは頭部のみとなっていたのは、一揆軍の人びとが戦いで首を取られたことを示しており、二万余の首を取ったとする文字史料に見える首切りとも一致した。

そして原城本丸の連続した外柵形で検出されたおびただしい人骨も、先述のように多数の受傷痕をもった。分部哲秋氏の分析によって大腿骨の受傷痕が特に多いことが指摘されている<sup>④</sup>。こうした様相は、岩手県の九戸城二の丸出土人骨と共通した。また『吉川家文書』に採録された「合戦手負注文」や「軍忠状」で怪我の部位がわかる四五例を統計的に見ると、首・胸の傷が一八％、腕の傷が二九％、腰の傷が一三％、足の傷が四〇％であった。文字史料から見ても足と腕の傷の比率が高かった<sup>⑤</sup>。

これは戦闘行為の中で刀や槍をもつ腕は自然に傷つきやすく、接近戦では相手の足を傷つけて動きを封じることが一般に行われていたことを示すと解釈できる。そうすると先に見た九戸城例も原城例も、特別な虐殺行為ではなく、当時の接

近戦の実像を物語ると思われるべきである。ただし原城例では調査を担当した松本慎二氏が、殺傷人骨の検出状況において胴部で切断された例が多いことを指摘している。通常の戦闘では胴部を切断するほどの傷を負わせる必要はなく、武器や武器の持ち出しによって遺体がある程度移動させたとしても、胴部で遺体が分離した可能性は低かった。つまり人骨の出土状況は、戦闘の中で幕府軍が意図的に胴部を切断していた蓋然性が高く、筆者はギリシタンに対した特異な行為と解釈できると考えている。<sup>⑥</sup>

さらに原城例では刀創痕のある人骨は多数検出されているが、火縄銃の弾丸による銃創痕を示す者は見つかっていない。この点は二月二八日の戦闘が、諸手が四方から突入する激しい接近戦で、刀など衝撃武器の使用比率がとりわけ高かったからだと分析される。

おびただしく折り重なった殺傷人骨は、城郭をめぐる戦いの容赦のない残忍さをまざまざと語りかける。落城の形態はさまざまであり、すべての落城がこのような文字通りの皆殺しを伴うものではなかったにせよ、最終的な決戦段階の戦場では、衝撃武器が圧倒的な役割を果たしたことが分かる。松木武彦はK・オッターバイン氏の攻撃具の分類を援用しつつ弥生時代の衝撃武器（刀・槍など）と投射武器（弓矢・つぶてなど）の分析を行っているが、<sup>⑦</sup>原城例は戦闘の推移と武器の使い分けを実証的に把握できる希有な例である。

原城からは膨大な火縄銃の弾丸、大砲の砲弾が出土している。これらは衝撃武器による戦闘の前に投射武器を主体とした戦闘があつたことを示す。事実、文字史料からはおよそ三カ月におよんだ籠城戦の大部分で大砲と火縄銃による両軍の射撃戦が戦いの主体であつたことがわかる。つまり原城の攻防戦では投射武器を主体とした戦闘から、城内乗り入りを経た決戦段階になって衝撃武器を主体とした戦闘へと移行し、最終的な勝敗が決したことを物質資料から具体的に読み取れたのである。

① 服部英雄・千田嘉博・宮武正登編『原城と島原の乱』新人物往来社、

二〇〇八年。

② Saiki K., Okamoto K., Wakebe T., 2006, Human skeletal remains excavated from the main castle area and zone beside the seventh stonewall in the Hara-Jo site, Nagasaki prefecture. *Anthropological Science*, 114, No.3. Wakebe T., Saiki K., Okamoto K., 2007, Human skeletal remains excavated from the main castle area in the Hara-Jo site, Nagasaki prefecture, between 1998 and 2003. *Anthropological Science*, 115, No.3.

③ 寛永一五年二月は二九日が末日となった(内田正男『日本暦日原典』雄山閣出版、一九九二年)。

④ 分部哲秋・佐伯和信・岡本圭史「長崎県原城跡本丸出土の人物——二〇〇三—二〇〇七年発掘調査分——」『第六一回・日本人類学会大会プログラム・抄録集』日本人類学会、二〇〇八年、九七—九八頁。

## おわりに

本稿で明らかにしたのは以下の通りである。まず考古学による戦争研究にとって、個々の物質資料を適切に把握することが不可欠であることを確認した。ついで整備された遺跡を事例に軍事性がどう理解されたかを点検し、遺跡の評価に矛盾があること、軍事性の視点から土木施設や建築施設がどのように機能したかを分析する必要性を述べた。さらに遺跡化した戦場では関連資料の「持ち出し」が一般的に行われたので、戦いの考古学的状況が保存された希な遺跡では詳細な闘経過と防御施設の機能を実証的に解明できるが、多くの場合は戦いの存否を直接示す資料を得ることが困難であることを示した。そして原城の発掘成果を通じて実際に行われた戦闘プロセスを物質資料からどこまで具体的に明らかにし得るかを試みた。

幕府軍が石垣を崩して遺体を埋めて処置したことで原城攻防戦の戦場遺跡は残された。原城のような特殊な遺跡化の過

分部氏によれば、受傷痕がある人骨の部位は、頭蓋二個体、左側上腕骨一例、左側寛骨一例、右側大腿骨十一例、左側大腿骨二例で、大腿骨の受傷痕がきわめて多かった。なお人骨の出土状況に關した詳細な発掘報告はまだ刊行されていない。人骨の姿勢からの戦闘状況の復元検討などは、報告書の刊行を待つて改めて検討したい。

⑤ 千田嘉博「日本とヨーロッパの城と戦い」『考古学研究』第四三巻第二号(のち千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、二〇〇〇年、二五五—二七二頁)。

⑥ 前掲①文献所収、千田嘉博「島原の乱」服部・千田・宮武編『原城と島原の乱』新人物往来社、二〇〇八年、九八—一三〇頁。

⑦ 前掲はじめに註①文献、松木武彦『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会、二〇〇七年。

程を経なかった城跡や防御集落では、記録から攻防戦の存在が分かるものでも、物質資料からは実際の戦争の有無を直接読み解く手がかりが失われており、物質資料だけの分析では堀や土塁、石垣や櫓がそもそも戦いに備えたものであったのか、それが実戦で使われたのか否かの証明はたいへん難しい。

だから本稿で検討した原城などの事例を特殊なものとし、非人道的な特異な戦争であった考えることもできるだろう。しかし先に述べたように原城は戦場をそのまま埋めた遺跡化の過程の特殊性によって、戦場の考古学的状況が残されたとすべきであり、結果として実像の戦場が発掘されたと評価される。原城で明らかになった戦場の悲惨さは特殊なものではなく、一般化し得る戦場の実態と捉えるべきである。そして戦場の考古学的状況をそのまま把握することができない多くの遺跡でも、原城などで明らかになった戦いの実態や、軍事施設の機能を踏まえた考察を行うことで、軍事性の視点から研究を深めることが可能になる。

吉野ヶ里遺跡の北内郭で見たように、たとえそのままの戦場は発掘できなくても、戦争のなかで諸施設がどう機能し、どう軍事性を発揮したのかを分析することで、遺跡の評価は大きく変わる。実際の戦争を行った痕跡が把握できなかったために、戦争のための施設ではないと評価してきた塚や堀を備えた遺跡も、改めて軍事性の視点から分析すれば、それぞれの時代における戦いの実像を考古学から捉え直すことが可能である。<sup>①</sup>

しばしば城郭遺構の評価で、「この程度の堀では機能しなかった」と断じたものが散見されるが、その基準は詳らかでない。城や防御施設は小集団間の争いから大名間の争いまでさまざまな戦いに備えて築かれたのだから、たとえ小規模なものでもそれが機能し得た戦いを想定して評価しなければ、遺跡や社会の評価そのものの根幹を見誤ることになるのではないか。

もとより堀や土塁・石垣、天守や櫓、城門などの施設は、直接的な軍事機能の発揮だけでなく、築城主体の権力の象徴性や権威の表象性を備えた。だからそれらを軍事的な機能だけで評価してはならないが、象徴性や表象性も基底としての

軍事機能があれはこそ、その効能を發揮し得た。象徴性や表象性を評価するにも前提としての（あるいは前提として想定され、仮託された）軍事性を正しく理解することが重要なのである。

現在、城跡や戦国武将がブームとなり、戦いをテーマにしたゲームやキャラクターグッズも広く普及している。これらは若者が歴史に関心を開く入り口として、また新しい歴史の楽しみ方として歓迎すべき点もある。ただし史実や実態を無視した武将や戦争の美化には大きな弊害がある。考古学研究は過去の戦争の実態に迫り、そこから歴史を問い直して戦いの実像を市民に伝えていくことが求められている。物質資料研究から解明される軍事性が機能した戦場は、非人道的で厳しい世界である。しかしその実態から目を背けて戦争を論じることができない。

① たとえば第二次世界大戦の本土決戦に関わる遺跡の実証的な調査の  
立ち場から戦争の考察を進めている。伊藤厚史『戦史考古学研究』第一  
取り組みとして、伊藤厚史氏の業績がある。伊藤氏はひとつひとつ戦  
号、二〇〇三年、『戦史考古学』第二号、二〇〇四年、『戦史考古学』  
争遺跡を踏査し、詳細な図面を作成して分析を行うことで、考古学の  
第三号、二〇〇六年。

【謝辞】 原城の発掘成果については、調査を担当された松本慎二氏のご教示を得た。イギリスのクリックリー・ヒルに関しては、成秀爾氏のご尽力で佐原 真氏の旧蔵書で原著を確認することができた。また報告後の討議で有益なご指摘をいただいたことで、内容を修正することができた。多くの方々のご学恩に感謝申し上げます。

（奈良大学文学部文化財学科教授）

# Castles and Warfare in Archaeology

by

SENDA Yoshihiro

The study of warfare from the standpoint of archaeology has clearly contributed to clarifying the processes of state formation and social evolution. However, it is necessary to understand and evaluate the military character of defensive works as physical objects in order to propose a more general theory. This article first points out the importance of understanding this military character. It then examines how archaeologists have interpreted the military character of the past through the investigation of the reconstructed defensive settlements.

As a result of this examination, one sees that at the Tawayama site in Shimane prefecture, from the mid first century BC, a completely developed triple-enclosed moat system served as defensive works and symbolically divided the area into three sectors. At the same time around the middle of the second century AD, within the northern walls of the moated Yoshinogari site in Saga prefecture, the design of the reconstructed palisade that accompanies the double moats is problematic because its structure is unnatural, preventing defense of the site. In both cases it must be admitted that the military character of the sites has not been sufficiently appreciated.

Furthermore, the mountain castles of the Warring States period (16th Century) in Japan serve as useful examples for a comparison of how warfare has been understood. Even at castles where it is certain that large-scale fighting took place on the basis of written sources, it is difficult to determine on the basis of archaeological investigations whether there had been warfare since physical artifacts generally associated with warfare have been carried off.

Additionally, as at Crickley Hill in England, where archaeological evidence of warfare is well preserved, at Kunohe castle in Iwate prefecture and Hara castle in Nagasaki prefecture, I have been able to reconstruct the manner in which warfare was conducted from these Japanese sites. Among these, in the 1638 (Kan'ei 15) defensive warfare of Hara castle during the Shimabara Revolt, the character of the warfare shifted from that using projectile weapons to that employing hand-held weapons, and I have made clear that when the castle fell, many people had been killed by hand-held weapons.

Facilities such as moats and embankments, keeps and towers, castle gates, did not function solely in a directly military fashion but were symbols of the power of the castle and its lord and a representation of their authority. Therefore, these objects cannot be appreciated simply in terms of their military function, but because symbolization and representation are at base also military functions, their effectiveness is manifest. In order to appreciate this symbolization and representation, a proper understanding of their military character is an important prerequisite.

Even if vivid remnants from battlefields cannot be discovered archaeologically, by conducting an analysis of a site in terms of its military character, as in the case of Yoshinogari, it becomes possible to re-evaluate sites in terms of their relation to warfare. In readjusting our understanding of the reality of warfare in each age, there arises the necessity of deepening our study of warfare from the archaeological perspective.

The Political Process behind the Order for the Kyushu Ceasefire:  
A Reexamination of the *Toyotomi Soubujirei*,  
Hideyoshi's Order for A General Peace

by

OSHITA Shigetoshi

Hashiba (Toyotomi) Hideyoshi ordered a ceasefire with Shimazu Yoshihisa to end the fighting in Kyushu in Tensho 13 (1585), but this event has been a point of contention in historical studies of the process of Hideyoshi's unification of the nation, i.e. the cessation of the conflicts of the Warring States period, and whether the aim of the policy was to bring about an end to warfare and institute a period of general peace is still a critical issue.

This article reconsiders the above-mentioned order for a ceasefire in Kyushu by again revisiting the political process prior to the opening of hostilities against the Shimazu in the seventh month of Tensho 14. The ceasefire order was a policy taken during a period when the dispatch of troops to Kyushu was not proceeding smoothly and the possibility of both war and peace were still being considered. Then, in determining the situation in the capital provinces as well as those in both the eastern and western provinces, the choice of peace at times weighed heavier while at others the choice for war weighed heavier in the balance, and finally this process led to the decision to open war against the Shimazu. The theory that